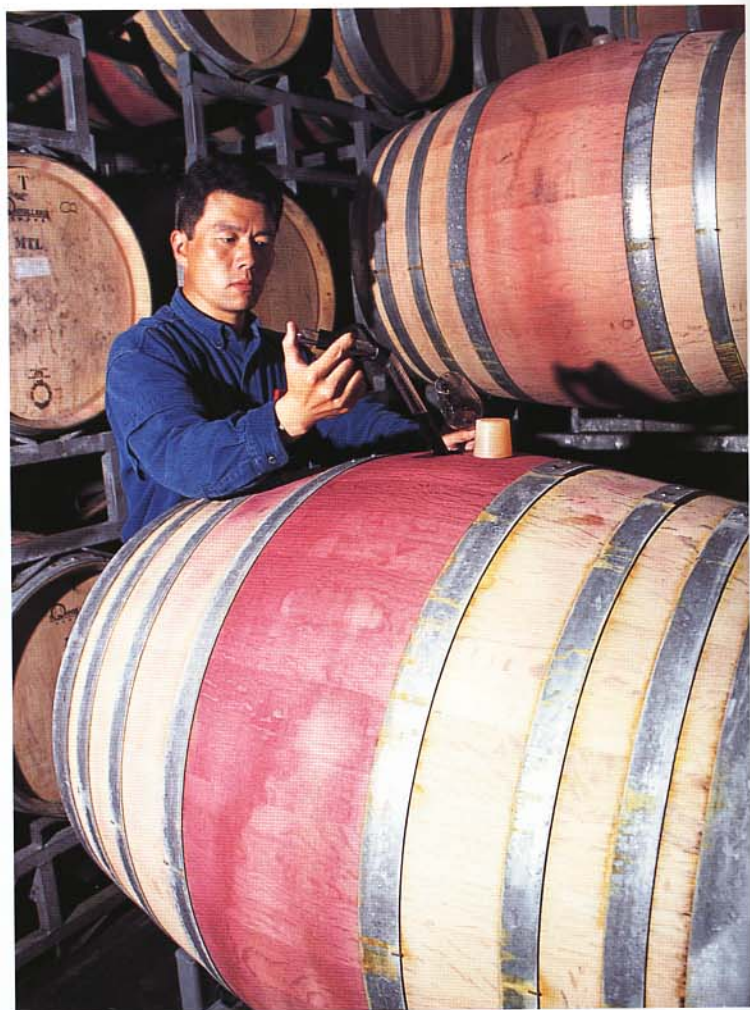


① 楠田さんが昨年リリースしたピノ・ノワール(右)とランコーニュ。日本では東京練馬区の「アサヒヤ」で購入できる。② 収穫を待つワイン用のブドウ。強風、乾燥、やせた土壌という条件が、世界でも最高品質のピノ・ノワールを育てる。③ 学生時代の卒業実験でも世話になったカイ・シューベルトさんのワイナリー。この施設を借りて醸造の作業を進める楠田さん。女性はシューベルトさんの相手のマリオンさん。



ことしリリースする瓶詰め前のワインを試飲させてもらう。ピノ・ノワール独特のふくいくとしたフレーバーが口中に広がった。



マーティンゴローの自宅玄関に集合した楠田さん一家。たっぷりした広さのある一軒家だ。

マーティンゴローを目指したのである。  
東京で生まれ、埼玉県の秩父で育った楠田さんが、マーティンゴローに落ち着く際に際しては、ひと口では語れない長いワインにまつわる前史がある。その序幕、人間形成における食の重要性を熟知していた両親は、小さなころから楠田さん兄弟(本人と兄)にはけしいていい加減なものは食べさせず、外食店に出かけることもついぞなかったという。  
「父は今でいう典型的なグルメでしたし、父の兄弟には和菓子の老舗に勤めている人もいました。兄もまた、ボクよりもずっと敏感な舌を持っていましたから……」  
こうして、大学(慶応大学法学部)に入るころにはカクテルや日本酒の味を好きわけ、学生時代はラグビーとワインに没頭した。最初に楠田さんの舌をとらえたのがドイツワインであったこともあり、ドイツではワイナリーでブドウの収穫を手伝ったり、ワインの利き酒コンテストにも出場した。学生の四年次、全国都道府県対抗日本酒利き酒大会では見事団体優勝の栄冠にも輝いている。  
しかし、大学卒業とともにワインは趣味に留める決意をした楠田さんは、某大手電気メーカーに就

分を見る目や、話を聞く態度が少しずつ変化したのを見逃さなかった。それは、ニュージーランドの社会にいつの間にか溶け込み、自信をつけた経営者の姿に、スタッフたちが敏感に反応した結果にほかならない。おのずと、多賀子さんがマルイアに滞在する日数も増えていった。  
昨年には、再びスタッフ総入れ替えの騒動に直面したが、辛酸をいく度もなめてきた多賀子さんに、もう動ずる気配はなかった。  
「ようやく、私が理想としていた宿への準備が整いました。苦しみよりも楽しみや学ぶことのほうが多く、幸せな十三年間でした。人に楽しんでもらうことを生きがいとしたことで、自分の人生も開けたのだと思います」  
趣味のハーレーをさっそうと駆る多賀子さんに、マルイア立ち上げ当時の焦りや不安はもはやない。まだかなりの借金を残すが、それは今後に向けての発奮材料にこそなれ、それに押し潰されることはしていない。  
「若いこの国には、伝統らしい伝統も、歴史らしい歴史もない。やる気さえあれば、誰でもこれからの歴史に名を残すチャンスがあります。でも、遊び半分で成功するほど、この社会は甘くありません」

職、四年後には国際交流サービス協会の派遣員として在シドニー日本領事館に勤務。二期四年の勤務が終わるころ、楠田さんにある気持ちの変化が訪れる。  
「就職してからも、好きなワインはずっと飲み続けていました。しかし、一生かけて飲みまくっても、自分が望むような「理解」に到達できないのでは、という疑念が離れませんでした。だったら、つくる側に回って、見えない部分を追究しなくてはという結論に達したわけです」  
シドニーではすでに妻玲子さんとの結婚を果たし、長男(健祐くん)も誕生していた。しかし、「チャレンジ」を誓った楠田さんに、家族が足手まといになるはずなかった。九六年に領事館勤務を切り上げて一時帰国した楠田さんは、その後一年をかけてドイツとオーストラリアのワイナリーで研修を積み、翌年ついに念願のドイツのヴィースバーデン理工大学(ガイゼンハイム大学)ブドウ栽培・ワイン醸造学部への入学を実現する。  
ガイゼンハイムでは一回りも年下のドイツ学生に交じっての充実した学生生活だった。二年後の秋にはフランス・ブルゴーニュの「ドメーヌ・ルジュン」で研修、さらに卒業研究の実験のため一カ

んが……」  
最後に多賀子さんは自分に言い聞かせるように言葉を締めくくった。そこには、観光旅行で来る者には分からない、生活者としての自負と覚悟がにじみ出ていた。多賀子さんは十三年をかけて、今まさにニュージーランド人の仲間入りをしたのである。

### 夢 趣味に留まらなかった

もうひとりの海外イタリーン者である楠田浩之さんは、北島南端にある首都ウエリントンから、車で東へ二時間半ほどかかるマーティンゴローに住む。マーティンゴローと聞いて、ワイン通の人ならすぐにピンとくるかもしれない。南島のセントラル・オタゴと並び、ここはニュージーランドを代表するピノ・ノワール(ワイン)の名産地であるからだ。  
この地に日本人の若きワインメーカーがいると知ったのは、昨年の秋のことだった。山梨でワインの取材をしている折に、あるワイン通の方から、「ニュージーランドにすごい日本人ワインメーカーがいる」と教えられたのだった。ほどなくその噂の人が楠田さんと分かり、個人的にもワインファンである筆者は、矢も盾もたまず

月間、受け入れ先であるマーティンボローの「シュールベルト・ワインズ」に出かける。

シュールベルト・ワインズのオーナーであるカイ・シュールベルトはガイゼンハイムの卒業生でもあり、楠田さんと意気投合するのに時間はかからなかった。この出会いが、ガイゼンハイム卒業後、楠田さんが再びマーティンボローに戻る決定的な契機となったのである。

### 可能性に満ちた

### 未完の大地

ニュージーランドからドイツに戻り、卒業論文の準備に取りかかったその年の夏の終わり、ドイツに里帰りのカイ・シュールベルトが楠田さんを訪ねてきた。彼の口から出た言葉は、「マーティンボローと一緒にワインをつくらないか」という夢のような申し出だった。玲子さんとも相談したうえで、二カ月後に正式にシュールベルトの申し出を受諾する。

ガイゼンハイム卒業後の楠田さんの行動は、まさに疾風迅雷を地でゆくものだった。卒業式から一週間後には引越し荷物をまとめ、慌ただしく日本に一時帰国。その三週間後には単身ニュージーランドに渡り、シュールベルトのブドウ畑で収穫を手伝うという早業だった。

でもらった。明るいうヴァイオレットの赤ワインはタンニンが少なく、上品なフレイバーに満ち、どこまでも繊細でしなやかだ。初めてのリリースであるにもかかわらず、日本のワインファンの圧倒的な支持を受けたというのも、よくうなずける。

「ヨーロッパのワイン産地はある意味で完成していると思います。私のような『部外者』が新しいワインづくりにも挑む場合、ニュージーランドのように国自体がワイン醸造の挑戦者であるような土地が一番向いている気がするんです」  
「ワインから離れても、この土地はとても魅力的で、暮らしやすいですね。みんなとてもオープンで、町中に挨拶が飛び交っているんです」



①西部開拓時代を思わせるマーティンボローの町並み。「開けっぴろげで、新参者にも親切。とても居心地のいい町ですよ」。②マーティンボローのローカルホテルのバーで見つけたワインケース。有名どころのワインが勢ぞろい。③マーティンボロー周辺はリンゴやキウイなどフルーツの特産地でも知られた土地。デザートづくりに取り組む奥さんの玲子さん。



④居間でくつろぐ玲子さんと長女の祐理杏ちゃん。⑤裏庭に置かれたトランポリンで遊ぶ長男の健裕くんは地元の小学校の人気者。



## ニュージーランド

た。作業の合間をぬって家を探し、車を買ひ、ビザ取得に向けての情報収集をし、着々と移住の準備を進めた。そして、〇一年五月末には、めでたく家族全員がマーティンボローに落ち着いたのである。  
幸運は続き、シュールベルトのところで収穫・醸造の作業が一段落したところ、楠田さんは思いがけない申し出を受ける。マーティンボローでも老舗に入るワイナリー「マイリー・ライズ」から、「畑を借りないか」と持ちかけてきたのだ。

「あのころはまだ、ニュージーランドの生活はまったく地に足の着いていない状態でした。今思い返しても、『よくもまあ、こんな都合のいい話が……』と驚いたくらいです」

そのリリースした畑（二ヘクタ）の初ヴィンテージは〇二年、そして昨年には早くも自らのワインをリリース。醸造作業はすべてシュールベルトのときの施設を借り、また初リリースに向けて「クスタダ・ワインズ」という会社も設立した。シドニー時代の九五年にワインメーカーへの道を歩む決意をして以来、八年目にして手にした快挙だった。

今回、楠田さんを訪ねた日の夜、その初リリースのピノを味見させ

翌日、シュールベルトのワイナリーで仕込みの作業をすませたあと、高台から「マーティンボロー・テラス」と呼ばれる美しいブドウ畑を見下ろしながら、楠田さんは静かに、また熱を込めて語った。昨年のヴィンテージによるビン詰め、そして二度目のリリースも間近に迫っている。「世界に通じるワイン」を追い求めての楠田さんの挑戦は、今始まったばかりだ。

### 【永住ビザ】

永住ビザは主に技能者・ビジネス・家族カテゴリーの3つの部門に分かれている。

技能者カテゴリーでの取得の場合、申請資格は55歳以下で、学歴・資格・職歴・現地での雇用保証などがポイント査定され、高ポイント取得者から合格者が決められる。新たに起業する人を対象とした長期ビジネスビザ（1999年3月に施行）の場合、当初9カ月間の就労許可が得られ、始業と送金が確認された後に最長3年まで延長可能。諸条件を満たし、ニュージーランド経済に貢献していると認められた場合、永住ビザが発給される。